

沖

俳句雑誌[おき]

9月号

沖 発行所

慣ひの順序

能村 研三

東京吟行

蟬声の慣ひの順序を違へをり

大輪は御霊鎮めの花火かな

群青の滝を仰ぎし祖の師系

大正は百年といふ合歡ぐもり

昔から人事句の「沖」と言われてきたためか、吟行句に弱いとされてきた時代があった。それを克服するために、東京例会では四月と八月の二度吟行句会に当てている。四月はお花見、八月は通常時の俳句文学館がお盆で休館となることから句会場を移しての吟行会となる。二度とも通常の例会より参加者が多く人気があるが、幹事役の役員の方々のご苦労も大変なことである。吟行場所の選定、資料作り、句会場の予約、そして二次会場を探し事前の予約等々。もうこのような形になつて十数年が経過しており、その吟行地も都内三十数か所にも及んでいると思う。午前中に集合し一、二時間程度散策してから句会場に行つて出句するという形であるが、このパターンもしっかり参加者に定着して楽しんでいただいている。吟行地も有名な所ではなくても、普段見過ごしてしまふところを改めて俳句を作る気持で歩いてみることに、その場所の魅力が光ってくるから不思議だ。おそらく俳句をやっていない人は、行くことのない場所であつたかも知れないと思うと、つくづく俳

角 打 ち の 枺 酒 旨 し 夜 の 秋

押上吟行

新 塔 は 反 り と 起^びり や 涼 新 た

新 塔 の 根 組 み は 鼎 爽 気 かな

震 ・ 戦 災 潜 り し 街 に 夏 惜 し む

秋 立 ち て 畳 の 上 の 椅 子 机

新 涼 や 父 の 手 擦 れ の 羽 箒

句をやっていたことが人生をいかに豊かにしてくれたかとも思う。

虚子とその一門は、昭和五年八月から月一度の吟行を行い、それを「武蔵野探勝」と称した。この吟行会は昭和十四年まで続けられ、ちょうど百回を数えたと言う。ホトトギスのお歴々が顔を見せ、句の記録の他に吟行地の状況なども克明に記録されている。参加者も昭和の初期であったにも関わらず関西をはじめ多くの門人が参加していることも記されている。

東京には私たちがまだ知りえない魅力が一杯隠されているように思う。「沖」の場合は今のところ年二回だが、まだまだ吟行地は豊富にあるようなので、武蔵野探勝にならって百回をめざしたいと思うので、次の機会には是非地方の会員の方も上京して参加いただけたらすばらしい。そして「武蔵野探勝」にならってきちっと記録として残していきたいと思う。

能村 研三

蒼茫集



鉾浴衣

成宮紀代子

朝どりの茄子に新車の光あり
紫陽花の毬擦つてゆく単線車
鉾浴衣吊られし部屋に通さるる
蒼天を長刀鉾の秀が突けり
大丸へひと傾ぎして鉾動く
茎すくと蓮の大葉は風の椅子

どつと夏

千田百里

箱根三句
師憶へば箱根空木の靄がかり
四葩酔ひして思考のスイッチバックかな
スイッチバック四葩休憩とや言はむ
衿・袖の邪険にされてどつと夏
センサーの外灯縫うてゆく溽暑
星涼しなでしこ嬢ら走る走る

蚊取線香

菅谷たけし

男梅雨箱根の山を濡らしけり
氷菓舐む整ひすぎし閑所跡
喪に服すやうに列島梅雨に入る
梅漬けて妻ぐつすと睡り落つ
蚊取線香二つに折れば二夜分
妣いままも鍋磨ぐ合歡の花の下

直線裁ち

久染康子

祭来る尺で裁ち切る手拭屋
話すだけ話し帰省子寝落ちけり
万緑を直線裁ちにケーブルカー
箱根四句
川床料理帳場へ帽子預けをり
登山電車青水無月の底方そこ発
欲深に非ず緑蔭に銭洗ひ

雄心 田所節子

天を向く雄心泰山木の花
父の日や父鈴なりの幼稚園
水海月けふの自分を消したくて
翠巒を掴みし雲の力瘤
槇椎の高さ涼しき武家の墓所
苔庭に色置く名残つつじかな

夕立 安居正浩

朴の花見上げるとは祈ること
夕立に浮世絵のごと走りけり
昼寢覚相方があてどぎまぎす
箱庭にウルトラマンを置いてみる
蛭袋夢をこぼしてしまひさう
あぢさゐのティアアラ囲ひは紫に

引き込み線 北川英子

堰を跳ぶ形に焼かれ上り鮎
列島の地軸のずれし梅雨猛暑

風待ちて朝焼いろにふくらむ帆
星合や引き込み線に入る列車
虹消えてもとの齡に戻りをり
ががんぼや当り散らして傷ついて

葭障子 酒本八重

向日葵や空がざらつくほどの数
切株が玉座となりし墓
泣けとこそ吊らる啄木の風鈴は
老ゆといふ責任回避葭障子
どん底をいく度見たる夏の月
朴散華もう一度読む師の手帖
東天紅 上谷昌憲

青梅雨や黙つて鶴を折るをんな
鍵の手に曲る国道男梅雨
鈴生りの青柿に雨上りけり
何か立ち上がりて沈む出水川
夕映の美しすぎる梅雨出水
蓮ひらく東天紅に日が差して

夏の月 宮内とし子

原色の似合ふ横須賀サングラス
青をもて描く闇あり夏の月
太古へと迷ひこむ径蟬の穴
風涼し寄木細工のペンダント
薔薇の名はすぐに忘れて薔薇に酔ふ
押すだけの木戸の開閉枇杷熟るる

いつぽんの 辻美奈子

自転車に空気押し込む芒種かな
東雲のいろの青薔薇ひらきけり
噴水の高さ定まるまで一寸
水打つて日暮や無国籍通り
茄子の花土の機嫌の良ささうな
ことば失へばいつぽんの文字摺草

壁 辻直美

極暑いま壁の如くに立ちにけり
夢に來てなにも言はずよ明易き

出くはして蛇もわたしも逃走す
虹立つと泥んこ遊びしつづ言ふ
涼しさや溪川の子が両手振る
次世代の子等蚕豆の莢の中

空 港 細川洋子

短夜の柱すくなき空港よ
のど越しの荒き蕎麦食べ夏越かな
紫陽花の土着の色となり來たり
大勢の蓮見何だかつまらなし
誘蛾灯風狂といふ美しきもの
反論の場にそつぽ向く百合同士

浮 力 松井志津子

闇緊まる花火師舷を走るとき
待つといふ時間さらさら蟻地獄
羽抜鶏浮力を得むと駆け出せり
精を出す発電風車青岬
家毎に鱻干してあり浦日和
薔薇十本病臥に暮るる誕生日

漣

荒井千佐代

小気味よくナンの膨らむ薔薇の昼
祝婚歌弾く梅雨冷えの鍵盤+をもて
ちろちろと夏至の木洩れ日文机に
漣のたどり着きたる浮巢かな
サングラス怒りし朱唇噛みしむる
海より戻れば箱庭も闇の中

滴りは

千田 敬

脱原発と宣ふばかり浮いて来い
一管を腰に差し往く宵祭
笛吹いて神を呼び出す山祭
滴りは点されど地球は回りをり
地獄谷鳥の高さに見て涼し
師のうたふ人間頌歌青葉風

生態系

秋葉雅治

わが書架の生態系の端に紙魚
人の世に托卵のあり浮いて来い

秘中の秘と見しが浮巢の刈られけり
緑蔭やふつと目覚めし白昼夢
辛疎な評聞く辣蕪食みながら
水浴びの場のながながと夏芝居

朴の花

望月晴美

朴の花こころ鎮もる色ならむ
二時間目プールの声は低学年
仙郷へといざなはれさう四葩坂
一点に青絞り出し滴れり
夏まつり露店割りふる符丁文字
溺れゐるごと着衣水泳授業かな

鬼百合

森岡正作

鬼百合に北条の血のありにけり
紫陽花を吃水線にケーブルカー
苔茫茫滅びし者の墓涼し
羅の胸奥何を秘めをらむ
炎帝に齒向かふシャツに絆の字
妻誰に逢ふ鰐広の夏帽子

潮鳴集

水上バス

齊藤 實

立て掛けて力抜けたる梅雨の傘
夕焼を運ぶ水上バスの窓
風鈴を聞きつつごろ寝あるがよき
甘酒の甘さのほどに生きてをり
玉葱の真中を切れば衣装持ち

旧道 高木 嘉久

高階に鉄材届く早梅雨
七夕竹独身寮に小さかり
これは本郷これは神田と書を曝す
旧道のカーブ愉しむ夏つばめ
眠らせてくれし風鈴にて覚むる

壮年の峰

林昭太郎

風を知る丈となりけり今年竹
紫陽花の朝の量感雨気はらむ
糠床の糠ひんやりと半夏生
ぼんやりと点る門灯遠かはづ
壮年の峰と思へり雲の峰

きつぱりと 栗原 公子

黒日傘防犯カメラにも死角
滴りや無味無色てふ放射能
水底に佇つかに仰ぐ青葉騒
夏大根断り文はきつぱりと
憂き日なりなんぢやもんぢやの花たわわ



沖作品



能村研三選

朴散るや休診札を掛けしまま

東京 能美昌二郎

初鯉海の蒼さを滴らす

家中の畳を拭いて更衣

夏立つや少年帽の横向きに

皮脱いで今日より竹と呼ばれたし

モンタンの鼻母音やさしねむの花

形見分けの黴の仏文コンサイス

青りんご宥むるやうに剥いてをり

水すまし前進瞑想繰り返し

炎帝殿十五パーセントの手心を

竹皮を脱ぐや登四郎全句集

草に寝て花火を待つてあたりけり

かなかなの鳴いて樹木の太りけり

手刀を切つて尺蠖折り返す

アンカーのごとく走れり羽抜鶏

岩手

浅沼 久男

市川

七田 文子

凌霄の風にあづける揺れ心地

埼玉

大石 誠

汐満ちて運河しづかに梅雨に入る

真清水に漁るごと銭洗ひけり

又聞きの話大きく泥鱈鍋

叱られて蚩袋の雨しづく

梅雨しとど塾歸りの子を耳で待つ

アマリリス朝日が蕊にすべり込み

蟻の列二列になれば楽しかる

寄席歸り日傘くるくるまはしたく

見えさうな風が海より花蜜柑

晒し鯨舌の覚える世代かな

腕白のおもかげふつとソーダ水

動物保護区露台のへだつ顔と貌

万緑やのぼつてくだるフリーパス

カクテルにあしらふトマト旅果つる

千葉

清水佑実子

市川

佐野ときは

作品 15句選評

*
能村研三

家中の畳を拭いて更衣 能美昌二郎

更衣の風習も次第にすたれてきたが、昔は衣服だけではなく、室内の調度や装飾の類を夏のものに替えることも、この風習にはあった。今でも形式を厳格に守る私立学校などでは、更衣が行われているようだが、ある意味では社会的な気分一新の意味を持っていたようで、夏にも正月気分を据えたようなものであった。そうしたことから考えると、家の中も夏バージョンにするには、まず家中の畳拭きをすることにした。更衣の句としては意外性があつて面白い句になった。

水すまし前進瞑想繰り返し 七田 文子

水すましは、泳ぐのではなく水の上に浮いている。定期的な前進を繰り返すわけでもなく、進んでは休みまた前進する。その動きを見ていると、水すましも何か深い考えがあつて、哲学的な瞑想に耽っているのかも知れない。こんな考え方をするのも、俳人ならではの見方であろう。人間にも言えることでもあ

るが、せかせか時間に追われることなく、水すましのよう

進しながらも瞑想に耽る時間も必要である。

アンカーのごとく走れり羽抜鶏 浅沼 久男

羽抜鶏は、羽替え時の、羽が抜けて鳥肌をあらわにした鳥で、しばしばじめで滑稽なさまを詠まれる。さまである。別に鶏同士をレースに出場させたわけではないのだろうが、羽をつけた鶏よりは身軽でリレー競技のアンカーを務める走者のごとく、羽抜鶏の張り切りぶりが見えてきて面白い句になった。

真清水に漁るごと銭洗ひけり 大石 誠

先日の箱根の勉強会での収穫作品。箱根登山鉄道の塔ノ沢駅のホームの奥に静かな趣の「深沢銭洗弁天」が佇んでいる。鎌倉の佐助にある銭洗弁天には私も行ったことがあったが、今回も訪ねてみた。この句の眼目は「漁るごと」という表現、「漁」は訓読みでは「すなご・る」と「あさ・る」であるが、ここは「あさ・る」と読ませると、「探し求める」、「むさぼり求める」の意味となる。信仰心の中にも人間だれもが持つ欲の強さにも言及している。

見えさうな風が海より花蜜柑 佐野ときは

蜜柑が栽培されるところは、たいがい海の近くが多いようだ。関東に近いところだと、湯河原や伊豆など。蜜柑山は海の近くの斜面を利用して栽培されている。海から吹いてくる風も蜜柑を美味しくさせてくれるのだろう。温暖な気候が蜜柑の生育にも適している。蜜柑山に入ってしまうと、真っ青な海の景色は一望できなかったが、海から吹いてくる風から潮の匂いを感じられた。(以下略)